

りょうぜん天蚕の会だより

【創刊号】



発行責任者 りょうぜん天蚕の会々長 柳沼 泰衛 (電話・FAX 024-586-3004)

町長あいさつ「古雅の里・靈山にふさわしい会の発足」

靈山町長 大橋芳啓

靈山町を語るとき、古（いにしえ）の文化にはじまります。

東北山岳仏教の拠点、南奥文化の中心として隆盛をきわめたこと。

北畠顯家が陸奥の国府を多賀城から靈山に移したこと、そして、蚕の町であったこと。

信達地方の生糸が、登世糸（のぼせいと）として京都に出荷、西陣の原料となるや、品質、量ともにめざましい進歩を遂げました。明治12年には、「第2回全国蚕糸業振興会」が「掛田」で開かれています。掛田の名は一躍有名になり、「掛田折返糸」はほとんど輸出に向けられ、一大蚕糸王国を築きあげた歴史を残す町です。

靈山の里が、靈山の自然が、ひたすら待ちこがれていた「天蚕の会」の創設です。

会員皆さんの創意に敬意を表しますとともに、限らない進展をご期待申し上げます。



会長あいさつ

去る2月5日に開催された設立総会において、はからずも会長に選任されました。約40名の賛同者の皆さんと力をあわせ、微力ですが有意義で楽しい会となるよう頑張っていく所存です。

この会の活動趣旨は、りょうぜんの豊かな自然環境を活かし、野蚕である「天蚕」の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成を図り、活力ある地域づくりを推進しようとするものです。

一方、靈山町はかつて蚕糸王国として栄えた歴史的背景があり、その文化財の保護や伝統技術の継承に役立つ活動についても推進する予定です。これら事業の実施は大変な面もありますが、原点は自然保全と優良天蚕繭の安定生産にあります。

さらに、この会が夢とロマンを語り合う地域人材交流の場になればと思っておりますので、皆様方のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

なお、この事業活動が、この度、県の地域づくりサポート事業の認定を受け、今後3カ年間の支援をいただくことになりました。

靈山町をはじめ、関係各機関に対し深く感謝申し上げご挨拶いたします。(会長：柳沼泰衛)

りょうぜん天蚕の会設立総会



平成17年度地域づくりサポート事業補助金90万円交付決定

この度、りょうぜん天蚕の会事業に対し、県北地方振興局の地域づくりサポート事業の補助が採択となりました。今後の安定的な事業推進体制ができましたが、設立総会時点では、サポート事業についてはお伝え出来ませんでしたので、ここにご報告いたします。

さて、事前には、1月末県北地方振興局主催による「けんぼくネット交流会」が開催され、事務局長（八島）が出席し、およその説明を受けていました。

総会后、事務局長は直ちに地方振興局に出向き、申請書について担当者と協議し、それを踏まえて庶務の菅野氏と9日の深夜までかかり計画書を書き上げ、翌2月10日の締め切り日、柳沼会長と事務局長と地方振興局に提出することができました。

限られた時間の中での申請となりましたが、幸いにもこの計画が採択となりました。

今回の計画申請は、地域づくりサポート事業趣旨に沿っていたとのことで優先的に採択され、3月18日には内示を受け、さらに4月1日付けで補助金交付申請書を提出することができました。4月12日には県より発表があり、県北地方振興局からは36件が選ばれ、当会は90万円の補助金交付が正式に決定されました。

今年の事業については、6月上旬の観察会を始め、小学校への天蚕飼育の教材提供、夏休みの親子勉強会、9月には先進地視察、10月下旬には天蚕繭の加工研修会など様々な事業を展開する予定です。

今後、3カ年間継続する補助金となりそうですので、当事業を成功裏に運営出来るよう努力して参る所存です。ぜひとも、会員皆様方の絶大なるご協力をよろしくお願い申し上げます。（八島事務局長）

今年の事業トピックス

・先進地視察研修会参加者募集

9月上旬、天蚕の飼育と繭活用の先進的な地域である、秩父や長野県穂高に研修の予定であります。

振るって参加下さい。詳しくは、別途御案内します。乞う、ご期待！



天蚕って、なあーに？！

農家で一般に飼育している蚕は「家蚕（かさん）」と呼ばれ自然環境では繁殖できません。

一方、天蚕は自然の環境で繁殖してきた「野蚕（やさん）」の一つです。

天蚕は、分類上、鱗翅目ヤマユガ科ヤマユに入り、日本原産で1年に1回のみ発生し（1化性といいます）、卵→幼虫→蛹（繭の中）→蛾（成虫）のサイクルで完全変態をします。冬は卵の状態越し、4月下旬頃ふ化します。幼虫は深く透き通るような神秘的な緑色を呈し、4回脱皮し（4眠）、5齢を経て繭を作ります。その時期は6月中下旬頃となり、長い幼虫期間が必要です。

天蚕の繭は、心が癒されるような若葉萌ゆる緑色を呈しています。そして、この繭からとられた糸は、織物の中でも「繊維の女王」「織物のダイヤモンド」と呼ばれ、高価な織物として珍重されています。

【天蚕飼育の様子から】



5月2日 ネットハウス内の飼料樹と山づけ



5月2日 天蚕の卵（山づけネット）



5月2日 ふ化して間もない幼虫



5月27日 横網縞に育った天蚕（4齢）

会員の声

萌葱色のまあるい家がありました。この家はどんな人が造ったのだろう？
窓もドア也没有せん。その家に住んでいる人に会いたいと思いました。
たしかに誰か居るのですが……
叩いても揺すっても何の返事也没有せん。
通りがかった人に聞いてみました。
「ああ、あの人ガイ！ほんならここさ行ってみらんしょ！」
教えられてやって参りました『天蚕の会』。
「こんにちわー、萌葱色の家の造り主さーん！」
……みどりの繭を何度か見ました。
でも、それをつくるお蚕様を見たことがありませんでした。
お手伝いできる事を楽しみにしております。

（ 掛田新町 川辺洋子会員 ）



【シリーズ：養蚕業を振り返る】

菅野公庶務が、かつて執筆した「本県の養蚕技術の変遷と養蚕業」をアレンジし、シリーズでお伝えします。養蚕とは何か、また郷土の歴史や先人の情熱を感じとり、我々の活動の励みとして参りましょう。

第1話 くはじめに>「生業（なりわい）となった養蚕業」

紀元前16世紀頃より中国において始まったと言われる「養蚕」は、日本に渡来したのは1～2世紀頃と伝えられています。これまで約三千五百年もの時を経て、ヒトのためにカイコは淘汰・改良され、現在まで多くの蚕品種が作り出されました。

ヒトが「絹」という魅力あふれる繊維製品を得たいがために、これまでの長い歴史の中で、人間だけのために役立つ昆虫にしたといえるでしょう。このため、もし人間が見放してしまえば、カイコは自然界で生きることのできないほど家畜化した昆虫となってしまったのです。

一方、カイコに近い仲間は現在でも自然界の極身近にいます。それは「クワコ」という、幼虫の姿は小ぶりで蚕に近い姿をし、色は茶色で保護色を呈しています。餌は同様に桑ですが、繭はこれがカイコの仲間のものかと思うほど貧弱で、お世辞にもまともな繭とはいえないものです。このクワコがカイコの先祖と思われますが、ヒトが生糸を得たきっかけは、これら仲間の繭から特に良いものが発見され、糸を煮出して繰り出し、紡ぐことから始まったものと考えられます。

そして、生糸生産を目的に、より糸の採れるカイコの卵（蚕種）を選抜するようになり、桑畑を作り、桑の葉を収穫しカイコを放すことから飼育が始まったのでしょう。さらに、多くの野外天敵などからカイコを守るため、家の中で飼育するように変化してきたのです。言わば「家蚕（かさん）」が命名されたゆえんといえます。

当初は農家が単独で蚕種の採取から飼育、糸繰り、あるいは機織りまで一貫して行うスタイルでしたが、ついには蚕種製造や繭売買、糸繰りや機織りなどの専門分化が進み、さらには製糸業などの大きな産業にまで発展するなど、多くのヒトはそれら分化した専門業にかかわるようになり、養蚕は様々な生業（なりわい）を育んできました。

一方、天蚕はクヌギやコナラなどを餌にし、日本原産の昆虫で蚕とは違いほとんど人為的な操作を受けたことのない天然の昆虫です。繭は美しい萌葱色（もえぎいろ）を呈し、まさに天からの恵みです。

しかしながら、「蚕」とは違って「天蚕」が人為的な改良や生業にまで進展しなかった理由は、生糸が取りにくいことや、飼育期間が長く行動が活発で飼育が難しいこと等が理由だったのでしょう。

（文責 菅野公）

【次回：養蚕とは何か～蚕が温度虫といわれるゆえん】

編集後記

・表紙の天蚕のイラスト、とても可愛いですね。

これは、県北農林事務所農業振興部に勤務されている阿部和弘さんに描いていただいたものです。本会のマスコットとして可愛がってください。

・2月5日にりょうぜん天蚕の会が結成され、役員会・幹事会を経て計画どおり天蚕の飼育が順調に実施されています。県北地方振興局のサポート事業が採択され、本年度事業の一環として6月5日には飼育観察会が開催されます。

・9月には長野県の現地視察も計画されています。皆様のご参加をお待ちしています。

・新規の加入申込みが今もあり、嬉しい限りです。

